

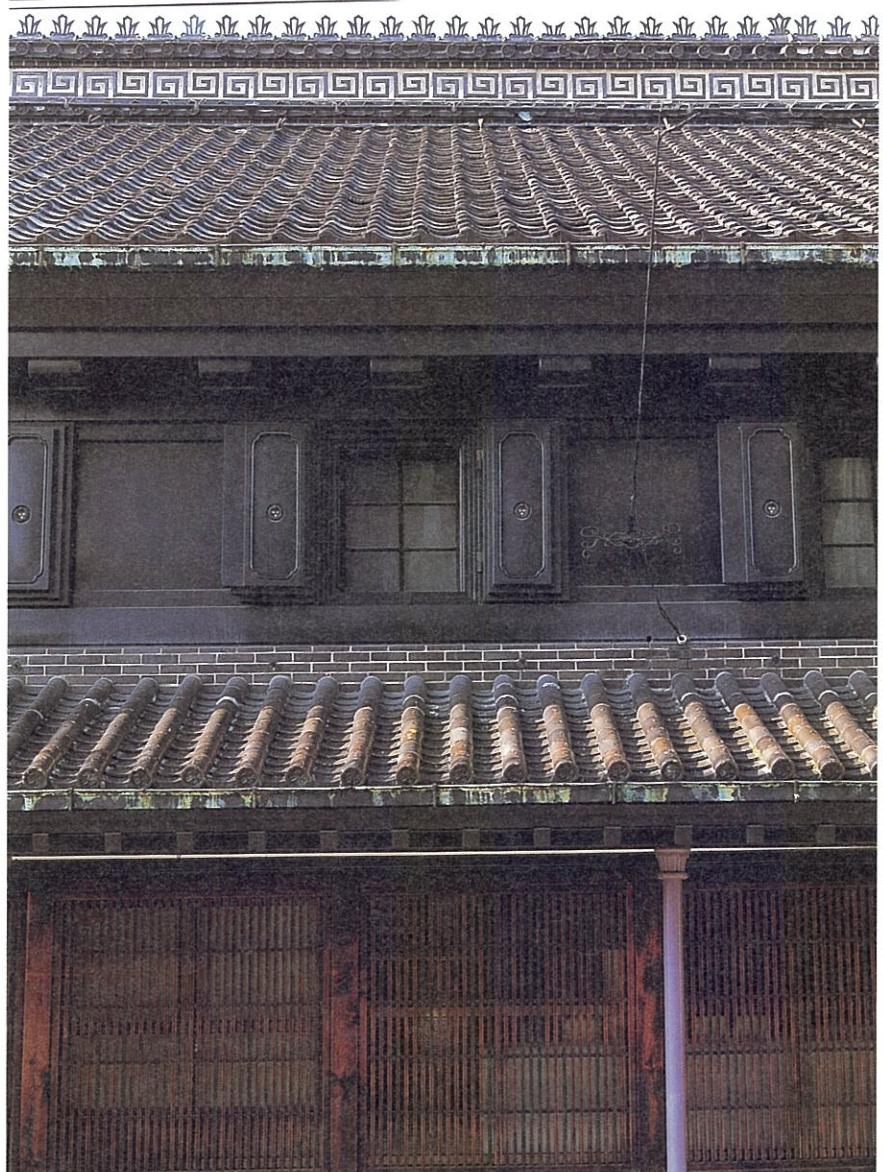
# 黒漆喰の土蔵建築

## 【菅野家】

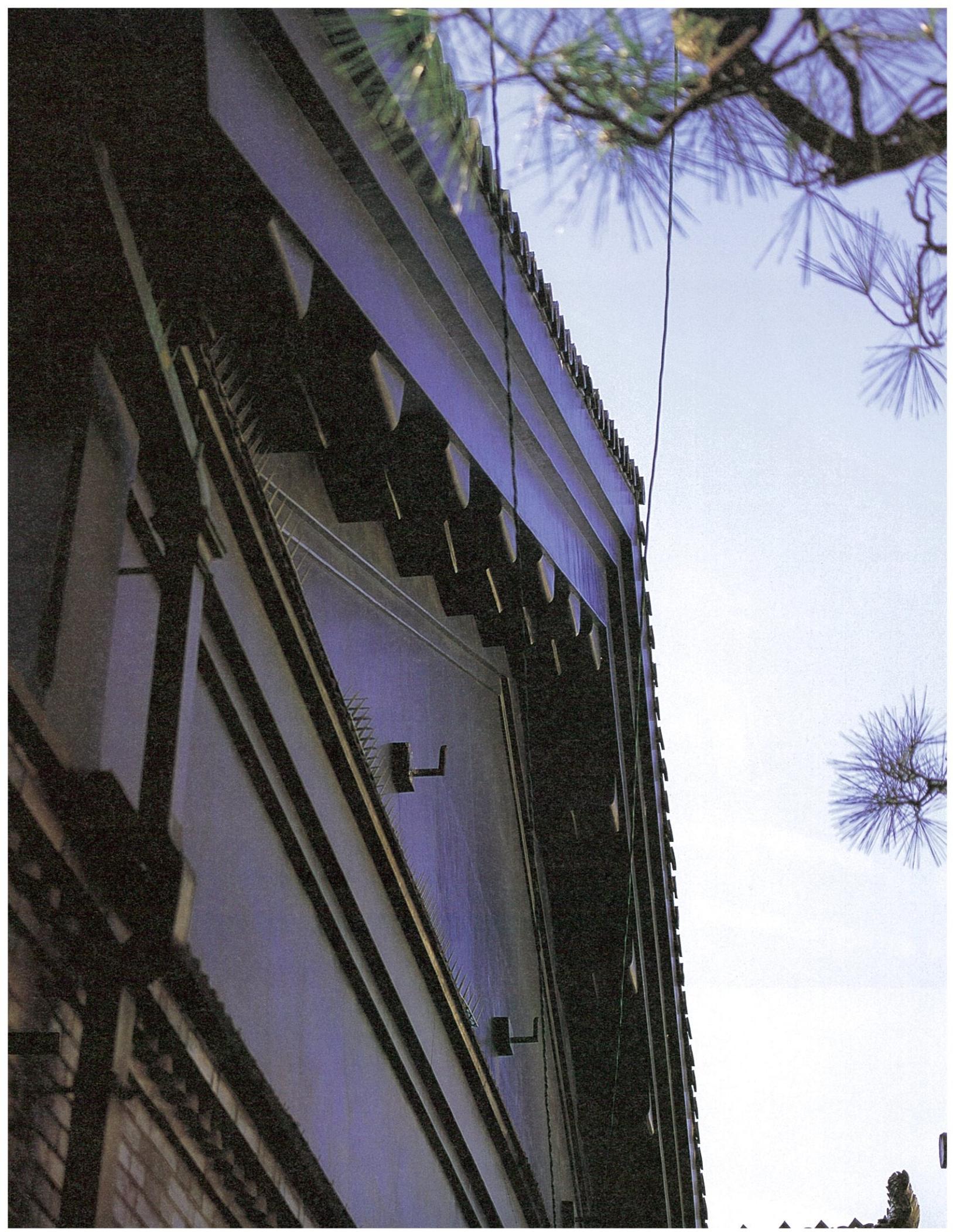
菅野家は商家で、幕末から明治にかけて売薬や廻船業で財を成し、後に銀行や電灯会社などを設立して国會議員も務めた高岡政財界の名家である。建物は明治33年(1900)の大火直後に建築されたもので、様々な防火のための工夫が凝らされており、隣家の境界は両側とも煉瓦の防火壁になっている。

主屋は、土蔵造りの2階建てで、正面に庇を付け、外壁はすべて最高級の黒漆喰磨き仕上げとした重厚な意匠になっている。正面1階の右側は大戸口で、他は狭間格子が連続している。火災のときは格子の外側に鉄板貼りの防火戸が引き出される仕組みで、庇を受ける柱も鋳物製の円柱である。両側の防火壁は釉薬煉瓦を用い、先端には御影石の飾り柱が立つ。正面2階は、観音開きの土扉を配した窓、軒は太い出桁先に厚い軒蛇腹を付けた塗籠(ぬりごめ)とし、屋根は雪止め付きの桟瓦葺きで、棟は雷紋や剣形の雪割り瓦をのせた見事なものである。

平面は、道路側をミセ(商談空間)とし、奥左側に賓客用の座敷、右側に内向きの部屋を配している。室内は土蔵造りでありながら、柱や長押などの部材は細く洗練されている。特に、座敷は銘木を多用した繊細な書院造り風の数寄屋である。また、中庭との間は化粧屋根裏の土庇とするなど、土蔵造りをまったく感じさせない意匠となっている。



外観両側の妻面は、腰煉瓦積の最上部を装飾煉瓦とし、妻梁を表わす幅広の水切りは力強い。2つの折れ釘がアクセントになっている。また、腕木に分厚い軒蛇腹や家紋付き瓦など意匠的である。





庇の屋根は本瓦葺きで、軒先の丸瓦には家紋が入り、銅製の角樋が付く。2階は、壁や軒、観音開きの土扉もすべて黒漆喰の磨き壁で、窓台や土扉の木瓜形の内側はふっくらとした曲面になっている。

銹物製の円柱、煉瓦積防火壁とその正面の石柱、煉瓦積の葺き止め、重厚な黒漆喰の外壁、雪止め瓦に飾り棟など、高岡の土蔵造り住宅の代表作である。

